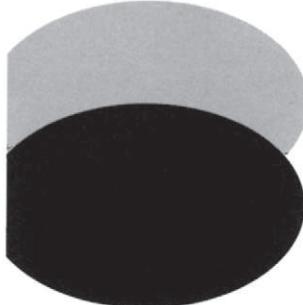


2011.12.12

絵本学会 NEWS No.41

発行：絵本学会
発行日：2011年2月12日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒567-8578 茨木市宿久庄2-19-5
梅花女子大学児童文学科 香曾我部秀幸研究室内
E-mail:ehon-g@baika.ac.jp
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~ehon/index.html>



2010年度絵本フォーラム報告
絵本の原点を探る—絵本における文(文字)の役割
2010年度絵本研究会報告
絵本研究の方法 絵本の構造論
第14回絵本学会大会のご案内
学生インタビュー 鴻池朋子
事務局からのお知らせ
お知らせ—絵本関連展覧会など

絵本学会

2010年度 絵本フォーラム報告 ——絵本の原点を探る—絵本における文(文字)の役割——

企画委員長 杉浦篤子

2010年10月9日(土)13:00～、北海道石狩市にある藤女子大学花川キャンパスにおいて、絵本フォーラムを開催しました。今回のテーマは、「絵本の原点を探る—絵本における文(文字)の役割とは」と題し、絵と文によって構成されている絵本にとって文字(文)の役割とはどのようなものか、絵本の役割とは何かについて探ることとしました。今回のきっかけとなったのは、絵本作家長野ヒデ子さんが描いた絵本「ひらがなにっき」のモデルとなった吉田一子さんを、NHK教育テレビが取り上げ、今年1月ETV特集で「なまえをかいた～吉田一子84歳」として放送されました。吉田一子さんは60歳から文字を学び始め、それまで自分の名前すら書くこと、読む事が出来なかった人であり、文字を獲得する事の意味と、喜びが映し出されていました。現在日本においては100人以上の人人が識字教育を必要としているということは驚きでもありました。

シンポジストとして東海大学国際文化学部の乾淑子教授、札幌で識字教育に携わっておられる札幌遠友塾自主夜間中学の工藤朱美先生、絵本学会員・藤女子大学の柴村紀代教授の三方にそれぞれの立場からのトークを展開していただきました。現在では、過去に教育

を受けることが出来なかつた人だけではなく若年層にも識字教育が必要になっていること、未開発国では現在も低識字率が高く、決して過去の事ではないということ。また心に残つたのは、識字教室に通っている人たちにとって絵本は、高価であり、難解でもあり、簡単に手に取る事ができない、気後れしてしまう物だということでした。

しかし絵本は今、あふれるように出版されています。絵と文によって私たちを想像の世界に連れて行ってくれる絵本は、もっと活用の方法が探られてもよいのではないかと思わせられるものでした。

2011年度 絵本フォーラムのお知らせ ——手作り絵本のススメ——

絵本フォーラムのワークショップも3回目になります。今度は東京で、誰もが出来る絵本作りです、あなたも作り手になってみましょう。

日 時：2011年4月23日(土) 10:00～16:00
場 所：日本児童教育専門学校

東京都新宿区高田馬場1-32-15

講 師：つちや ゆみ氏 絵本作家・絵本学会員

折った紙を繋げるだけでページがふえていきます。
ストーリーのある文と絵、絵だけのアートブックなど出来上がった中身に表紙をつければもう立派な絵本さあ、絵本を作ってみましょう！



2010年度絵本研究会報告 テーマ：絵本研究の方法 絵本の構造論

講師：中川素子

ゲストスピーカー：バーサンスレン・ボロルマー（絵本作家）

日時：2010年10月9日（土）13時30分～

会場：日本女子大学

主催：絵本学会研究委員会

2010年10月9日（土）午後1時より、日本女子大学目白キャンパスにて、2010年度絵本研究会「絵本研究の方法 絵本の構造論」を開催しました。当日は悪天候の中、北海道から宮崎まで、全国各地から50名の参加がありました。

第1部では、中川素子会長が「絵本の構造論」について講演しました。信貴山縁起絵巻やブルーノ・ムナーリの『きりのなかのサークス』にみられる線構造、東大寺南大門の運慶・快慶作、東大寺の金剛力士像とビル・ビオラの「天と地」そしてジョン・バーニンガムの『なみにきをつけて、シャーリー』に共通する対位法構造など、構造のタイプが紹介されました。作品の構造をみつめることで、表現コンセプトを考察するという研究方法に、参加者から「視野が広がった」、「いつもとは違う絵本学会の会で、刺激を受けた」等の感想が寄せられました。



また、講演のゲストスピーカーとして、モンゴル出身の絵本作家、バーサンスレン・ボロルマーさんをお迎えしました。ボロルマーさんは、2010年7月に『お月さまにいるのはだあれ？』（企画中川素子、津田紀子訳、文教大学出版事業部）を出版しました。中川会長の指導のもと、対位法構造で、日本とモンゴルの月にまつわるお話を1冊にした、オープンエンディングの絵本です。第14回野間国際絵本原画コンクールグランプリに輝いたボロルマーさんの絵本『ぼくのうちはゲル』（石風社、2006）と第19回国民文化祭上陽町絵本大会グランプリ受賞作『モンゴルの黒い髪』（石風社、

2004）を翻訳した、長野ヒデ子さんも応援にかけつけてくださいました。ボロルマーさんは、子どもの頃から絵を描くのが好きで、4歳から絵画教室に通いました。家ではお祖母さまがモンゴルの民話をたくさん話してくれて、それをよく絵にしていたそうです。子どもの頃の話から、絵本作家になるまでの経緯、創作方法について、また、現在制作中の絵本についても日本語で話してください、終了後には大きな拍手がわきました。

休憩をはさんで、第2部では、参加者を小グループに分けてワークシートを用いて、絵本研究の方法とその可能性について話し合い、情報交換をしました。「有意義な時間だった」という感想がある一方で、「参加者の関心はさまざまで、話が拡がり過ぎて残念だった。批評論、批評方法について話し合いたかった」という声もありました。研究委員会では、参加者のみなさまのご意見を今後に活かしていきたいと思います。

ご参加、ご協力いただいた大勢の皆さんに、心より感謝申しあげます。2011年度の絵本研究会は大阪で開催します。



講演会のご案内

スージー・リー自作を語る

～3部作『なみ』、『かげ』、『かがみ』と『不思議の国のアリス』をめぐって～

日時：2011年2月27日（日）

会場：日本女子大学 目白キャンパス 新泉山館（しんせんざんかん）2F会議室 主催：日本女子大学

韓国の絵本作家、スージー・リーの講演会を日本女子大学で開催いたします。参加ご希望の方はメールでお知らせください。

アクセス方法は日本女子大学のHP：<http://www.jwu.ac.jp/grp/access.html> でご確認ください。

参加費：無料

申し込み：件名に「スージー・リー講演会」と書いて、2月24日（木）までに、石井までメールでお申し込みください。

メールアドレス：ishiim@fc.jwu.ac.jp

第14回絵本学会大会のご案内

大会テーマ：絵解き・絵巻・曼荼羅と絵本

日時：2011年6月11日(土)・12日(日)

会場：大正大学 〒170-8470 東京都豊島区巣鴨3-20-1

第14回絵本学会大会を大正大学で開催いたします。

大正大学の建学の精神は仏教です。この機会に仏教と絵本とのつながりを考え、絵本の可能性をさらに広げることをねらいとして、テーマを「絵解き・絵巻・曼荼羅と絵本」といたしました。

仏教文化のなかでも、絵は重要な役割を果たします。大正大学教授（元学長）小峰彌彦による曼荼羅についての講演、紙芝居作家の

諸橋精光による大型紙芝居の上演など、今大会ならではの企画をたくさん用意しています。

絵本と仏教を重ね合わせて、情報メディアとして絵本のおもしろさを再発見したいと考えています。詳しいプログラムは次号でお知らせいたしますが、たくさんの方のご参加を期待しています。

(第14回大会実行委員長 シャウマン ヴェルナー)

第14回絵本学会大会研究発表者・作品発表者募集

第14回絵本学会大会研究発表者・作品発表者を10月から募集しておりますが、あらためてご案内いたします。

● 第14回絵本学会大会研究発表者募集

○研究発表募集要項

1. 発表者の資格：絵本学会の会員で、2010年度までの会費を納入済であること
2. 発表テーマ：絵本及び絵本に関連のある研究テーマで未発表のもの
3. 発表時間：発表20分間 質疑応答10分間
4. 申し込み要領：
1) 発表テーマ、2) 発表者の氏名・住所・電話 FAX番号・メールアドレス、3) 所属機関名・職業など、4) 発表要旨(800字程度)、5) 発表時に使用する機材(パソコン、PCプロジェクター、書画カメラ等)以上の1)～5)について、パソコンで横書き入力したものを作成し、A4用紙に印刷し、絵本学会事務局宛てに郵送(FAX、メールは不可)してください。また内容をワードのファイルでFDまたはCDに入力して同時に送ってください。なおワードがお使いになれない場合は大会事務局にご相談ください。
5. 申し込み締切：2011年2月28日(月)(事務局に必着)
6. 発表者の決定：研究発表は、原則として無審査とします。
発表順・時間等は、4月中にお知らせします。
*受理した原稿等は返却しませんので、必ず控えをとってください。

● 第14回絵本学会大会作品発表者募集

○大会会場に会員の作品を展示し、会期中の所定の時間に出品者自らが制作趣旨を口頭で発表します。

○作品発表募集要項

1. 発表者の資格：絵本学会の会員で、2010年度までの会費を納入済であること
2. 発表作品：未発表の絵本(個人制作、共同制作ともに可)
3. 発表形態：判型・サイズ・頁数等は自由
原画を原寸でカラーコピーしたシートの全画面と、カラーコピーなどで製本したものを1冊出品すること。
4. 申し込み要領
1) 作品タイトル、2) 発表者の氏名・住所・電話 FAX番号・メールアドレス、3) 所属機関名・職業など、4) 原画サイズ・枚数以上の1)～4)について、A4の用紙にパソコンで横書き入力したものを、絵本学会事務局宛てに郵送(FAX、メールは不可)してください。
作品は絶対に郵送しないでください。発表者自身が、直接会場に搬入します。
5. 申し込み締切：2011年2月28日(月)(事務局に必着)
6. 発表者の決定：作品発表は、原則として無審査とします。
作品搬入の期日・方法等については、4月中にお知らせします。
口頭発表の順・時間等は、4月中にお知らせします。

【申し込み先】

〒567-8578 茨木市宿久庄2丁目19-5

梅花女子大学こども学科 香曾我部秀幸研究室内 絵本学会事務局

【問い合わせ先】

〒170-8470 東京都豊島区巣鴨3-20-1

大正大学 文学部人文学科 シャウマン ヴェルナー研究室内

第14回絵本学会大会事務局 w_schaumann@mail.tais.ac.jp

研究委員会から

2011年度の研究会を、7月10日(日)午後に大阪府立中央図書館会議室で開催します。

第1部は、公開インタビュー「せとうちたいこさんの 絵本作家に

聞く」(語り手：長野ヒデ子さん、インタビュアー：巽真理子さん)。

第2部は、ラウンドテーブル方式のグループワーク。

申し込み方法などの詳細は、次号ニュースでお知らせします。

ガゼイ Interview ②

鴻池 朋子



プロジェクトギャラリー VOLCANOISE の前で鴻池さん（中央）と

12月12日(日)、アーティストの鴻池朋子さんのお話を聞きに、文教大学教育学部美術専修の学生5人が、お茶の水駅に近いプロジェクトギャラリーVOLCANOISEに伺った。鴻池朋子さんは、東京都現代美術館、森美術館、大原美術館などでの巨大絵画「物語シリーズ」や東京オペラシティアートギャラリーでの「鴻池朋子展 インタートラベラー 神話と遊ぶ人」などで話題をよび、また、ギリシャ、オーストリア、イタリア、アメリカ、中国など世界各地で活躍している。出版されている絵本は青幻舎の『みみお』のみだが、本の中に世界が繰り広げられる「焚書 World of wonder」やオープブックシリーズ「ウィローティット」、頁をめくれる大きな本にアニメーションが映し出されるビデオインスタレーション「ミミオーオデッセイ」など、物語や時間や本と関係した作品が多い。また、ご自分が好きだった絵本などを並べた「深度図書館」などの作品もある。

インタビューさせていただいたのは、4年の松田隆史と清水絢子、1年の大内彩記子と小坂井ゆきか、それに研究生のバーサンスレン・ボロルマーである。ちょうど訪問日の1週間前に文教大学で鴻池さんの講演会を開催し、私たちは作品の全容を見せていただいたので、それぞれの興味をもって質問することができた。最初は緊張したが、鴻池さんの活き活きたお話しに時間を忘れ、楽しい時間を過ごすことができた。(学生一同)

松田：絵本『みみお』の中身を見ると、表紙の印象と全然違ったのですが、くみみおというキャラクターについて、どんな風に鴻池さんは設定を決めていますか。まず性別はありますか。くみみおの見た目は森の妖精のように自分は思いましたが、人間的なものがあるのか、動物的なものがあるのかという、『みみお』の設定について教えてください。また、くみみおの名前の由来はなんですか。

鴻池：『みみお』は最初は絵本ではなく、アニメーションから生まれました。芸大生が大学で鉛筆画のアニメーションを作っていたんです。見ていたらぶるぶるっと線が動いて、心がざわざわとしたんです。それで「ねえねえどうやって作るの？」って作り始めたのが最初です。学生のことだから適当なことを言うんですよ。「簡単ですよ、すぐ作れますよ、1ヶ月くらいで。」って。だから「そうなんだ、やるやる。」とか言ってやり始めたんです。

最初に音楽を見つけてきたら、音楽自体は4分間くらいで、1秒間に15枚で動かすと、大体1分で900枚、4分×900でフルで描いて3600枚を描くんだと思って、描き始めたんですよ。しかし、みみおが1歩歩くだけでも15枚以上あるわけですよ。アニメを作る時は初めてだったので、たった1歩あるくのに、丸1日かかったんです。「歩くってどう動くの？」とか思って。何日かやってるうちに、「これって作れるの？」ってなって、その時初めて、「できないんじゃないの？」という冷や汗が出るような先が見えない恐怖感にかられました。とにかく1人でやってても駄目だから、聞いた学生にもその友達にも手伝いに来てもらって、ものすごい量を1ヶ月半くらいかけて描いてきました。動かすために描かざるを得ない状況に陥ってしまったんです。

私の場合、やりたいと思うとやっちゃうんだけど、後から冷静になって考えると、焦って、色々なことを考えて人に頼ったりするんですよね。でも自分の限界を超えて作っていると、今までなかった能力も出てきたりして、作っていくうちに誘導されて、どんどんできていくんです。そして大変過ぎて死ぬような思いをしたので、もうアニメは2度と作りたくないと思ったんですね。作品はできて嬉しかったけど、その半端でない大変さにもうやめようと思って、今度は1枚の絵をゆっくりじっくり時間かけて凝縮させたものを作りたいなと思ったら、「あ、絵本だな」と思ったんですね。絵本もコマが展開していくじゃないですか。ただ1枚の絵を見るだけとは違う、読み手が自分でページをめくって、ページとページの間を読んでる人の想像力が繋いでいくじゃないですか。お話をもっと膨らまして断片的な絵を自分の想像力で繋いでいく感じも、その機能も面白いなと思って。

ちょうどその時に「絵本を作りませんか？」っていうタイミングもあって、それでできあがったんですね。最初は、みみおは登場せずに、風景だけがアニメーションの中で変化し進んでいったんです。自分が山を歩いて、スキーをして、また森を歩いてオオカミと出会って…そういう自分の視点だけで風景画面が進んで行ったんです。でもそれをラフで見たときに「何か面白くないな」と思ったんですよ。自分が観客目線に立って見ると全く面白くなかったのです。そこでいろいろ考えるうちに、私の目の代わり、つまり観客の視点の役割をしてくれるようなものが画面の中に何か必要だと解ったのです。

そうしてみみおが画面に登場しました。視線の代わりですから、

別にそこに目、鼻、口などのついた顔もないし、とりあえず誘導してくれる最低限の手と足があるようなものであればいいなと思っていました。みんなには「顔付けて」って言われたんですけど、なぜか顔はつけたくない、その自分の気持ちを尊重したんです。10年たった今、「顔をつけなくてよかったんだ」と思いました。でも頼まれて顔を描いたりしてみたこともありましたよ、可愛いみみおちゃんもいました。でも基本的には顔がないことが非常に重要なことだったんです。あとはみんなの想像力で十分だったんです。名前の由来は、みんなが「手が耳みたい」と言ったからですね。

松田：2009年に上野の森美術館でやっていた「ネオテニージャパン」展で鴻池さんの

アニメーションを見たんですけど、あのアニメーションは、学生に手伝ってもらって作ったものですか。

鴻池：あれはアニメーションを作った2回目で、3年ぐらいのことです。もう2度とやらないって言ってたのにやったんですよ。アーティストは馬鹿ですね。もう嫌だって言ってもまた作りたくなっちゃう。でも2回目はあんな思いをするのは嫌だって少しは学習しているから、続けて描いてると辛くなるので、何かしての合間にちょこちょこって描いたのが、2年くらいでたまっていったんですよ。だからすごい思いで描いたってわけじゃなく、余裕を持って制作できました。1998年のときは1枚描いてガラス盤の上に乗せて、ビデオレコーダーのハイエイトで撮影して、それから音を入れて編集してというアニメの作り方が、2003年にはパソコン1台ができるようになったんですね。

松田：その時見たアニメーションの登場人物が、みみおとかも知らずに見ていたんですけど、作品の中に説明的なことはないじゃないですか。だから、友人と2人でずっと「いや、こうなんじゃない」「実はこうなんじゃない」と話し合っていました。観客に想像させるっていうアニメーションという主旨を今回初めて聞かせていただいたので、ようやくわかったっていう気持ちになりました。

鴻池：アニメーションって動くから面白いじゃない。動くものはなぜかみんな見るんですよ。動物でもなんでも。だから、動いてるものを見るって1つの楽しみ、それと違って絵本は止まっているんだけど自分がページを捲るということで物語が進み、自分がページを捲らないとそこで止まる。開けば再び物語は始まるし、アニメとは全然違う親しみ、やりとりがあるじゃない。絵本は開くと始まっちゃうのに、途中まで行って「もう嫌だ」と思ったら自分で閉じられるという機能が何と言っても一番、すごく人間にとって主体的なメディアだと思うんです。

電車の中でも、あんなに人がたくさんいるのにみんな本を読んでる。開くと全然違う次元が本の中で広がっていて、またそこから戻って仕事に行く人達を見ます。開いていることによって別次元の奥行きが広がっていくわけですよね。本に何が書いてあるかなんて、みんなそれぞれ好きな本を読めばいいんですよ。みんなそれぞれに好



絵本『みみお』青幻舎 2001 より
©KONOIKE Tomoko

きなものがあるわけですから。でも、その人にとっては何か重要で、だからそういうことを可能にしてくれる束の間の別次元の奥行き、読者がこの世じゃない所との会話ができるというのが、やはり本の最大の魅力ですね。その面白い機能を最大限に活かし、作品になつていったりもするんです。

小坂井：今『みみお』のキャラクターがどんなふうにできたかを聞かせていただいたんですけど、先週の講演会のときに、「インテラベラー 神話と遊ぶ人」展の赤ん坊「Earth Baby」を作るときに、「光るものがきれいだなと思ったのを大きくしたらどうなるんだろう」という「遊び」から生まれたと聞きました。『みみお』という話自体はどのような「遊び」のなかで生まれた作品ですか。

鴻池：まずストーリーは関係なく、本のファンクション、メカニズム、機能の面白さの広がりがありました。キャンバスという絵を描く支持体の代わりを手に入れたわけです。絵本というものはこれじゃないと成立しないという本に対する自分の中で発見がありました。また、私は字がそんなに読めないんですね。字が読めないっていうのは、ちゃんと読んでいくっていうのが苦手で、タイトルをつける時もよくわからなくて、なぜ言葉を絵に付けなければならぬかの理由を誰も教えてくれなくて、しかたなく自分でタイトルと遊び方法を見つけて、その世界との付き合い方をしたんですけど、絵本の言葉も自分なりの方法で見つけていきました。

本が開いて始まって閉じて終わるというのは、それで日本で生きていると、春夏秋冬という四季の流れとか、日が昇って沈むというもっとも単純であり普遍的な流れと似ていると思ったんです。そこにタイトルをつける時と同じように(註 文教大での講演会での話：大原美術館での個展の時に、作品が有るのに何故タイトルをつけなければならないのかと疑問に思い、つけたがわからず、ホテルの部屋にあった聖書と仏典とマンガの中から一語ずつランダムに選んで絵を描くようにくみあわせて付けて行ったという)、春のような何か光を自分の中でイメージしながら、普通の雑誌からで

も、本からでも、あとはなにか全然関係ない研究書とか漫画からでもいいんですけど、そこから拾っていって、置いてただけです。そうやって、コラージュされたばらばらの言葉が、もう一度自分で想像力をかきだしてくれて、なんかこういう風景が見えるとか、この文字からこういう風景が見えるとか、この秋っぽい感じだなあとか、それは別に秋だから秋の季語が使われてるというわけじゃなくて、このおいとか過去の湿り気とか、この季節に合うだろと、絵具をつけていくような感じで、文字も絵も置いてきました。もちろん基本的に、春だったらスミレが咲いて、冬だったら雪が降って、夏だったら昆虫が出てきて…っていうそういうみんながわかるベーシックな言葉と、自分なりの感覚的な言葉を取り入れてやっていたって感じかな。ストーリーがあるというよりは、自然に何かがやって来て、何かが終わっていくということをやりたかったのかなって思いますね。

大内:『みみお』や、巨大絵画の「巨人」や「シ

ラー 谷の者 野の者(狼)」などいくつかの作品のなかで、オオカミやハチやナイフなど、似たようなモチーフが多く出てきていますが、どうしてそのようなものたちを選んで使っているのですか。

鴻池: 自分の日常の中にあるような、人間ではない友達のような存在。野良猫がいたり、近所の犬がいたり…ちょうど家の向かいに空き地になった原っぱがあって、田舎の中じゃなくて大都会の真ん中で、周りにビルが林立する中に、タンポポ畑があって、ちゃんとそこにスミレが咲いて、ハチが来たり蝶が来たりしてました。森の中にいて森を感じるのではなくて、都会の中の森だからこそ明日ここはもしかしたら駐車場になってしまふかもしれないというこのずっと続かない刹那的な風景のなかに存在しているものが自分にとって切実に重要だという気がしたんですね。

そういう感触がオオカミの毛になって、ナイフのしゃきんとした、きらっと光るような感覚になったり。ハチはそのままハチで出できますがハチは海外の人からは「メッセンジャーだね」と言われましたね。そういう何かしらの日々の生活の中で感じている肌触りに近いようなものが認識できる形となって、画面におかれていく。眼に見えるような形を成さないんだけど、自分のまわりに必ず存在しているような重要なことを、みんなに親しみのある1つのキャラクター性として入れ込んでいけば、少し共感してくれると思ったんです。

ボロルマー: あなたの作品には、オオカミがたくさん描かれていますね。なぜオオカミを選んだのですか。私はモンゴル人ですが、モンゴルではオオカミを幸運の動物だと考えています。モンゴル人は



《第4章 帰還—シリウスの曳航》(部分) 2004
©KONOIKE Tomoko

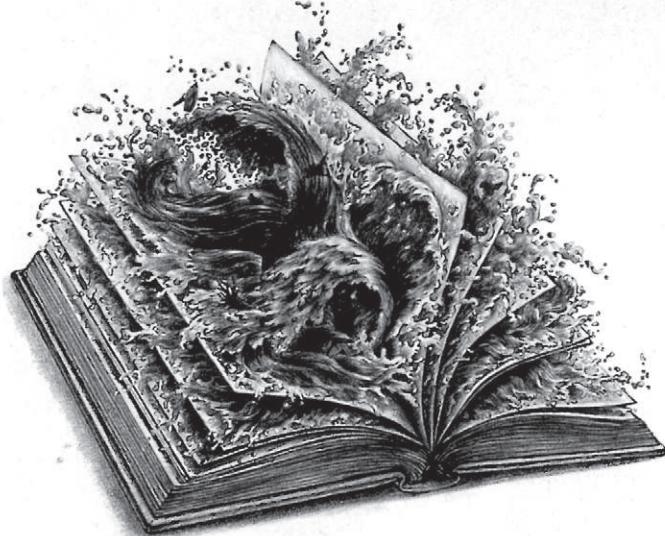
自分たちの祖先はオオカミととらえ、身近な存在と言います。一般的に日本人にとってオオカミとはどんな動物ですか。

鴻池: 一般的にみんなが思うのは「赤ずきんちゃん」に出てくるイメージではないのかな。あのイメージは全世界的にあると思う。

「3匹の子豚」のオオカミもそうですね。みんながもっているベーシックなイメージというものがあるんです。私はオオカミをいいやつだと思っているけど、みんなはいじわるとかちょっと怖いとか、女性を襲うとか、そういうイメージで見ている。私はそういうことを感じていなくて、みんなが違うように思っているのとどのようにすり合わせて、私の作品中のオオカミに違うものを再発見してもらえるかな、という思いがありますね。みんなの考え方はバラバラ。両義的で、良いと悪いが共存する、それが魅力的だったんです。オオカミは森の生態系の一番上にいる頂上種でもあります。オオカミにとってはどうでもよいことですが、人間の思いがそのように全部読みとっていくんだな、と。好き嫌いの判断基準はその人の中のストーリーによって組み込まれていくと認識しながら作品を作っていますね。

清水:『焚書 World of wonder』の出版を考えられているようなんですけれども、あの作品の中では本の中に自然世界がポップアップ的に繰り広げられていますが、絵本をどのようにとらえていますか。

鴻池: さっきも言ったように、本を開くと始まって、閉じると終わるということですね。



《焚書 World of wonder》2007 より
©KONOIKE Tomoko

清水: そうですね。さきほどは主体的なメディアということで…。

鴻池: 展覧会も行かなきゃ見れないんですよね。『焚書 World of wonder』の場合は、「ポップアップ絵本ってすごくいいなー」と思って買ったんですよ。たとえば『不思議の国のアリス』のポップアップなんかトランプがこんな風に大きく回っているでしょ。面白いから眺めてるんですけど、しばらく眺めてるとつまんなくなっちゃう。

インテリアグッズのようにずっと飾っておくと、つまらなくなつて、飽きている自分がショックでした。「なんでつまらないと感じるんだろう?」、「ポップアップ絵本がつまらなくならないように、ずっとおもしろさをとどめておけるようにするにはどうすればいいんだろう?」と思ったときに、ポップアップをもう一度誰かの世界の目で見るという視点を与えてあげてみてはと思いました。

つまりそのポップアップしている風景をもう一度カメラで覗くように絵として描き、一枚の絵に結晶させてみたんです。そのときに、立体ではない面白さが見えてきた。なんだかずーっと見てられる。まず対象をよく見て、何かを再発見した上でないと、表現というものはできないものだと思います。絵がうまいだけじゃ表現できないんです。

松田:『みみお』を鉛筆で描く理由は、そもそもぞざわざわとアニメーションにすると面白いという話をさっそく伺ったんですけれども、絵本の『みみお』の場合も鉛筆で描こうと思った理由は何ですか。

鴻池: まず、アニメーションって鉛筆じゃなくてもざわざわさせることはできると思うんですよね。絵本とアニメーションの時間の流れは違うけど、本質的に同じものを持っているような気がして、鉛筆じゃなきゃいけないと思ったのは、鉛筆って真っ黒で描いても、ざらっと描くと白い点が入るじゃないですか。しっかり描こうと思うと、黒でベタで塗ればいいんだけど、こういう光が入ることが嫌だけどいいなあと思った。嫌っていうのはしっかり黒くなってくれない。いいと思うのは、やり直しがしっかりできる、鉛筆の太さが変えられるということかな。

松田: たとえば『みみお』をキャラクターとしてぬいぐるみ化にしませんかという話があったら鴻池さんはどうしますか。

鴻池: 去年もう産経新聞がぬいぐるみなどグッズを作りました。基

本的にグッズを作ろうが、絵を描こうが同じ気持ちでつくっています。

小坂井:『みみお』の文章っていうのも、前回の講演会でのお話であつたタイトルを考えた時みたいに、言葉を色々なところからもってきて作ったんですか。

鴻池: そうですね。好きな言葉をいただいて来てコラージュする感じですね。最初からひとつの文章になってるのでなくて、バラバラな絵具の断片をもう一回自分でシャッフルして繋ぎ合せたような感じで、「おっ! これなかなかいいものが見えてくる」というときがあるんですよ。絵を見るような感じで。そういう方法が成立したのは日本語だからじゃないのかなあ。日本語ってあいうえおってひらがなの中に「くちゅくちゅ」って漢字が出てくるじゃないですか。漢字の中には象形文字としての風景があって…難しい漢字や言葉であっても、読めないけどわかるってものがある。それは日本語を使ってる人にしかできないと思うんですよ。

ボロルマー: あなたにとって、絵を描くことと、絵本やアニメーションを描くこととは、どんな違いを感じますか? どちらが好きですか。

鴻池: どっちも面白くて、どっちもやり始めると大変だけど、本は持って歩いて、大事にできて…自分の体と一緒にいれるそういう機能がいいじゃない? 絵は、持てないじゃない。でも、「おお!」という出会いがある。絵画は自分が動いてその場所に行かないと、出会えない。見る人にとっての出会いはいろんなシチュエーションがあるんだと思う。どちらも同じように必要なものだと思う。私がというより、みんなが感じるんじゃないかなと思う。つまり私の中にたくさん観客が住んでいるんだと思う。自分の中にどれだけたくさんの観客をみんなが持っているかということで変わってくるんじゃないの。

大内: 「インター トラベラー 神話と遊ぶ人」展で、地球の内核から地表に出てきた最後に、絵本などを並べた深度図書館がありましたね。この深度図書館は鴻池さんにとってどういうものですか。本を選ぶときに、どのような絵本を選んでいますか。

鴻池: (鴻池さんはちょっと待ってねとギャラリーの2階にあるアトリエからアリストン・アトリーの『むぎばたけ』、片山健の『おなかがすくさんぽ』、チャールズ・M・シュルツの『It Was A Short Summer, Charlie Brouwn』など何冊かの絵本をもってきて、それらの絵本を手にとって見せながら話してくださった)

深度図書館をやったのは、展覧会が立派に終わっちゃうのが嫌だなと思っていたんですよ。立派に終わったら、「私って、なんちゃって」と言いたくなるんですよ。しっかりやりきって立派な展覧会で普通に終わることもできたんですけど、観客は地上に出たらまた日常に戻っていくわけじゃないですか。それは、普通の生活であり、作っている私だって同様に、普通の生活をして、普通の人と同じように生活しているということをやはりどこかでつなげていかないと、成立しないという葛藤が自分の中であったわけです。ちょっと前の時代になると、そういう「なんちゃって」というものを見せないで、観客と作品の距離をもたせることが重要だったんですけれど。例えば昔は絵を描くという職業はある特殊な限られた人々のもので



したが、今は誰でもみんな普通に絵を描いていられるという、ベーシックな大前提が時代的に違っているのですね。そうなってくると、作家を見る人が並列になっちゃってるわけですね。「私、作ったりもするけど、見もするし、あなたも作るし」っていうそういう時代にいることが1つ大きなバックグラウンドにあって、そうなってくるとその「なんちゃって」とか「だつたりして」とか、というのをどこかに置いておかないと、今日的な表現にはならなかったわけですね。「深度図書館は必要ない、余計だ」っていう人はすごく多くいたんですね。影響を受けた本なんか知りたくないって人もいたけど、私としては批判されてもこの展覧会で一番やりたかったポイントなのかなと思いました。又、絵本というものの見方をみんな何も知っていないなというのはありました。私の場合、1ページ見ただけで「うわーっ」ってなって、その影響で展覧会作っちゃうことくらいがあつたわけだから、それだけでアニメーションが1本出来上がった感動がその1ページにあつたりしたから。そういう出会いをしてるんです。みんなは絵本とは何か子どものためのものとか、非常に観念的なものでやってるけど、絵本に育てられてる大人っていっぱいいるんですよ。大人のほうが救われたりするんですね。だからその世界だけは、年齢関係なく人間全部に対して、絵本それ自体は何か小さいんだけど、たった一人でも自分で開けるような世界になってるということが重要なものだなと。あと、自分で持つことができて、身体に密着できることは、重要なんじゃないかなと。

「惑星はしばらく雪に覆われる」
2006 ミヅマアートギャラリー展示風景
©KONOIKE Tomoko

ちょうど『みみお』の絵本を作る前に、シアトルに全然違う仕事で行くことがあって、休みの日に何日間か図書館と本屋さんに行きました。本屋さんにはコーヒーショップと読書用のテーブルと椅子があり、図書館みたいに新書を開けて見れるような設備があって、それが嬉しくてずっと通ってたんです。何百冊という絵本のコーナーをずっと見ていくと、文字を読まないでも、表紙の絵を見ただけでその絵本の特質がわかっちゃうんですよ。

何が自分にとってOKか、悪いかっていうのをジャッジして、ものすごい速さでものすごい冊数を見ていって、30冊くらい買って帰ってきたんです。さらにその中から、「これはいいな」と思った3冊が、後からびっくりしたんですけど、全部クリス・ヴァン・オールズバーグの絵本だったんです。絵柄も技法も違っていたので、同じ人って分んかったんです。でも、あんなに数多く見た中から、この一人の作家を選んじゃった自分のものすごく好き嫌いのはっきりすることにびっくりしちゃったわけですね。

私ったら絵本を捜す前から決まってたように選んでるなって。その中の一冊『THE MISTERRIES OF HARRIS BURDICK』を紹介しましょう。日本語に訳されてるんですけど(『ハリス・バーディックの謎』)、日本語はちょっとピンとこなくて…。見開きの片頁に絵、



もう片頁に短い呪文のような言葉が書かれているだけで、全部そういうページなんです。短い文章だから難しくなくて英語でもなぞ解きをするように読んでいけます。

この絵本の成り立ちも不思議です。別にオールズバーグが作った話じゃないんです。ある人が出版社の ANDERSEN PRESS に原稿を残して「また来る」と言ったままその人はそれっきり戻ってこなかつたんです。たとえば THE HARP の頁では、「So it's true he thought. it's really true」というだけ。この英文を読んでみて、ちょっと日本語に近いような感覚になりましたね。漢字の風景を読むみたいな。そのように見てるんですよね、私の目は。きっと人にはその人にとってのものを見ている目があって、それは単に映っているものを見てるんじゃなくて、きちんと見てるものに対しては交流が、対話がなされてるんですよ。自分に純粹にものを作っていくと見えてきたりとか。絶対その人が何をいいと思ってみているかは、その人しかわからなくて、本人も描いてる時はわからなくて。

多分私がこうやって自分の作品のことを話せるようになったのは、ある程度の年数がたって、ものすごく大きな共通項が見えてきたりして、自分で再発見してるから話せているような気がする。

だからたった 1 枚の絵で何かを判断するっていうのは難しくて、人は、作家は…こうやって長い年数で見てかないと、見てこないような感じもします。その人が何を見てるのかっていうのを、様々な作品を相対的に見て、わかるような気がする。だって、重層的で複雑な人間を何か 1 つの職業で伝えることって難しいじゃないですか。だから私はなんでも屋さんだなって思うんですね。

でも、はたしてそれが何か美術なのか芸術のかつていうと、すごく自分の中では曖昧で、でも多分、今まで他の表現できちんと言えてなかつたのであれば、又それが共感が得られるのであれば、そこに何か 1 つの芸術という言葉を導いていくようなこともできるかなと思っています。今まで絵を描いたり彫刻をつくることだけが美術と言われてたけど、そうじゃないものであっても表現が成立するというのは見えてきました。例えば観客という「見る人」でさえも、絵を見て想像力で何かを再創造している表現者であると思うのです。

清水：今まで絵本について聞いてきましたが、この間の講演会のときも DVD の映像で展覧会の様子を見ていて思ったことがあって、アーティストって絵を描いてとか、立体を作って、飾る時は飾る時でまた考えるっていうのだというイメージだったんですね。だけど、鴻池さんの展覧会っていうのは全体を、私、第一印象で、「テーマパークみたいだな」と思ったんです。その展覧会全体を構成する最初は意義とか楽しさとかを最初は聞きたかったんですけど、展覧会をつくるための発想方法を教えてください。

鴻池：「基本的にいままでの作品を全部見せたいです」って美術館の意見があって、皆さん知ってるようなものを入れなきゃいけないというルールが 1 つあったんです。

あと、10 年間というページの流れもあるわけですよね。立体があつたり平面があつたり動くものがあつたり…メディアの違いというルールというか、分け方というものがありますよね。そういう風に最初全部わけていく。

ちょうど 1 年半年くらい前の夏に森美術館でアネット・メサジェの展覧会をやってたんですよ。ヴェネツィアビエナーレで金獅子賞をとった展示で、インスタレーション作品を作る女性作家なんですけど、昔の人形劇やサーカスの仕掛けのようなものを使って展示していたのを見て、展示の裏側を見たくなり頼んで見せていただきました。裏側はすごくシンプルでした。誰でもできるような仕掛けを使いながら、ものすごい複雑で豊かな表現をやっていることに驚きました。そして「これでいいんだ、こういうことなんだ」と思い、自分の展覧会をつくり上げる中ですごい共感を得ました。絵本というのも、そういう複雑な人間の思考の動きを単純な仕掛けで子どもに言えてるわけで、大人は馬鹿にして「絵本なんて」と言うかもしれないけど、難しい事を難しく言うことが伝わるというわけじゃなくて、たった 1 ページ開くことによって、世界がわかっちゃうような経験をもしかしたら子どもはしてるかもしれないと思ったときに感じました。

清水：そういう展覧会や絵本のことなど、これからのことについてお伺いしたいと思います。

鴻池：3 月にミヅマアートギャラリー市谷田町(03-3268-2500)で個展があります。そこと連動して、この VOLCANOISE のギャラリースペース (03-5296-8807) でも同時に何か催し物をやると思います。今年はアジアの海外展も多いですね。「焚書 World of wonder」はぜひ絵本という形にしてみたいですね。

一同：今日は楽しいお話を本当にありがとうございました。

タイピング：大内彩記子
レイアウト：清水絢子

事務局からのお知らせ

2010年度 第3回 絵本学会理事会 議事録

日時: 2010年 10月 17日(日) 13:30-16:30

会場: 日本女子大学 新泉館 4階 児童学科会議室

出席者: 中川素子(会長)、香曾我部秀幸(事務局長)、石井光恵、今田由香、大橋眞由美、杉浦篤子、永田桂子、長野ヒデ子、藤本朝巳、シャウマン・ベルナー(次回大会実行委員長) 欠席者: 今井良朗
議長: 中川会長

○審議事項(大会関連)

1. 第14回絵本学会大会の準備について

シャウマン大会実行委員長(大正大学)

・日程は 6月 11日(土)、12日(日) で決定。

大会テーマは「絵解き・絵巻・曼荼羅と絵本」とする。

・参加費は会員 1,500円、一般 2,000円(1日のみ参加の場合 1,500円)、大学生以下は無料とする。

・講演: 小峰彌彦氏(大正大学前学長)に曼荼羅をテーマとした講演を依頼。

・シンポジウム: テーマは「絵と語り」(仮)

諸橋精光氏(長岡市の真言宗寺院千蔵院住職、紙芝居作家)

～動かない絵

亘間行雄氏(映像作家・子どもの城A V事業部主任指導員)

～動く絵

落語家(未定・人選中) ～絵のない語り

司会: シャウマン・ベルナー氏

・ラウンドテーブル: 3つの分科会を企画中。

作家論、絵解き、

作品論(『蜘蛛の糸』)、コーディネーター: 中川会長

・研究発表、作品発表の申込み締切は 2011年 2月 28日(月) とする。

・作品発表のテーマ、発表形態が多様化してきているため、規定を見直すことが今後の課題として挙げられた。

○報告事項

1. 各委員会報告

①紀要委員会

・今年度は 11編(10編の研究論文、1編の研究ノート)の投稿があり、査読中。

・紀要委員による投稿原稿は、外部査読を依頼した

②機関誌編集委員会→審議事項へ

③研究委員会

・今年度の研究助成: 「こぐま社の絵本」研究、日韓比較絵本オノマトペ研究の2件の応募があり、承認。

・研究会(10月 9日、日本女子大学で開催)には、50名(うち会員25名、一般 25名)の参加があった。第一部は中川素子会長による講演、ゲストスピーカーにバーサンスレン・ボロルマーさん。第二部は研究方法に関するグループディスカッションを行った。

④広報委員会

・NEWS41号掲載予定の学生によるインタビュー記事の企画、執筆を募集したが、申し込みがなかったため、理事会にて検討した結果、次回は文教大学にて担当することとなった。

⑤企画委員会

・絵本フォーラム(10月 9日、藤女子大学で開催)は 35名の参加者があった。

テーマは「絵本における文(文字)の役割」。話題提供者は乾淑子さん(東海大学)、工藤朱美さん(自主夜間中学)、柴村紀代さん(藤女子大学)。

藤女子大学人間生活学部保育学科との共催で開催した。

・次回フォーラムは 2011年 1月 30日に山形大学にて開催する。講師は画家、絵本作家のさいとゆふじさん。

講演と紙版画技法で絵本を作るワークショップを行う。

委員会予算はここで消化する。

○審議事項

1. 会員の入退会の承認(敬称略)～入会者 21名、退会者 1名

新会員: 鈴木美樹子、濱田夏実(準会員)、赤羽尚美、山本恵子、梅野智美、大谷朝、泉智子、溝渕優、田部井佳代、岩下明子、傳田久仁子、中山美加(準会員)、大野まり子、齊藤美緒、朴熙周、大石都希子、高尾兼利、倉地宏幸、菅まき子

退会者: 鈴木文枝

2. 機関誌の今後の発行について(継続審議事項)

・前回の理事会での審議に引き続き、今後の機関誌「絵本BOOKEND」発行のあり方を審議した。

広報に力を注ぎ、できるだけ販売冊数を伸ばす努力をしながら、アニュアルレポートとして学会の活動を紹介する方向で検討することになった。

たとえば、大会テーマを深めた記事を掲載し、研究会、フォーラム等の活動報告を掲

載し、学会の活動の全貌が明らかになるような内容で、毎年積み重ねることを目指す。

・次号は、2011年度末(2012年 3月末)までに発行する。

・今後、できるだけ予算を抑える方法を検討する。

・朔北社の在庫保管料が嵩むとの報告あり、事務局で引き取ることを検討。

3. 2011年度絵本研究会について

・次年度絵本研究会は、大橋委員が担当して大阪で講演会(公開インタビュー形式)を行う予定。

長野ヒデ子理事、巽真理子さん(大阪府立大学女性研究者支援センター・同大学院人間社会学研究科)に依頼中。

4. その他

・専門委員会において決定された事項に関しては、理事会では報告事項として承認するのみであるので、理事間のメールでの確認でも構わないこととする。

ただし、審議事項に関しては理事会の席上で決定する必要がある。

以上を再度確認した。

次回理事会は、2011年 1月 8日(土) 13:30から。日本女子大学児童学科会議室で開催する。

2010年度第4回 絵本学会理事会議事録

日時: 2011年1月8日(土) 13:30-16:30

会場: 日本女子大学 新泉館4階 児童学科会議室

出席者: 中川素子(会長)、香曾我部秀幸(事務局長)、石井光恵、今井良朗、今田由香、大橋眞由美、杉浦篤子、永田桂子、藤本朝巳、シャウマン・ヴェルナー(次回大会実行委員長) 欠席者: 長野ヒデ子
議長: 中川会長

○報告事項

1. 会長挨拶
2. 第3回理事会議事録の確認
3. 第14回絵本学会大会の準備について

シャウマン大会実行委員長(大正大学)

・開会式は例年より一時間早く開催する。そのため、理事会も10時から開催。

・第1日の講演後に、諸橋精光氏による超大型紙芝居の実演を計画
・ラウンドテーブルの話題提供者、コーディネータ等内定。

「大学教育のなかの絵本づくり」

佐藤博一氏、小林史子両氏、コーディネータ: 宮崎詞美氏

「編集者と絵本」

澤田精一、細江幸世両氏、コーディネータ: 村中李衣氏

「蜘蛛の糸」

関口安義、諸橋精光両氏、コーディネータ: 中川素子氏

4. 各委員会報告

①企画委員会

・2010年度絵本学会フォーラムを1月30日(日)に山形大学にて開催する。

「身近な体験から生まれる絵本」をテーマに、さいとうゆふじ氏による講演、ワークショップ形式で行う。

・2011年度絵本学会フォーラムは4月23日(土)に日本児童教育専門学校にて開催予定。

テーマは「手づくり絵本のススメ」。講師は、つちやゆみ氏。参加費は1000円(材料費を含む)。

一般、学生含めて定員を30名に設定。

②紀要編集委員会

・今年度は11編の投稿があり、論文3編、研究ノート2編の採用が確定。1論文は書き直しの上、再審査とすることになった。

・字数1万5千字以内を厳守するよう執筆要項に明記し、NEWSでも報告する。

③機関誌編集委員会

・審議事項へ

④研究委員会

・公開インタビュー「せとうちたいこさんの絵本作家に聞く」開催決定。

日時: 2011年7月10日(日) 13:30-16:45

会場: 大阪府立中央図書館大会議室

第1部 語り手: 長野ヒデ子さん、 インタビュアー: 巽真理子さん

第2部 グループワーク A室～読者論、読者支援論、B室～表現論、C室～学際的研究法。

定員 70名、参加費無料。参加申し込み送付先: 絵本学会事務局締め切り: 6月20日。

予算に関しては審議事項へ

・会員向けのチラシをNEWS送付時に同封する。

⑤広報委員会

・次号は2月中旬発行予定。原稿は今月末締め切り。

・NEWSの発行は紀要投稿の募集、研究発表の募集、大会のお知らせの時期と合わせて、2月、5月、10月に発行することが確認された。ただし、状況に応じて変更の可能性あり。

○審議事項

会員の入退会の承認(敬称略)

新会員: 川内五十子、辻豊史、今村光章、いしら ゆうこ、宮川健郎、沖中重明

2. 『絵本ブックエンド 2011』について(機関誌編集委員会)

・経費を削減しながら、絵本学会独自の紙面づくりを試みる。

・特集を組むことをやめ、大会報告を兼ねた紙面づくりを検討し、掲載内容の見直しをする。

・新刊絵本座談会、絵本コレクションガイド、研究書ブックレビュー、フォーラムと研究会の報告、日本における絵本研究の動向、絵本評論(国内外)等は継続掲載する。

・朔北社在庫の『絵本ブックエンド』は事務局で保管する。

以上のことについて審議、確認された。

3. 来年度の研究会予算について(研究委員会)

・フォーラム同様、会場を借りてイベントを行う場合、かなりの費用がかかるため、活動費の増額を審議し、研究会活動費を10万円に増額することが決定した。

・研究会を大阪で開催するにあたり、関東在住の理事3人の交通費は研究会活動費に含まず、理事交通費として予算計上することが確認された。

4. その他

(事務局長より)

・各委員会会計報告のお願い

・『絵本ブックエンド 2010』の執筆者贈呈分(昨年度は2冊)の送付について、会員執筆者には1冊、会員以外の方には2冊贈呈することが確認された。

(会長より) 以下のことが提案、承認された。

・ホームページのアップに関して、これまでの学会活動のうち、未掲載の記事をアップする。

・「研究」の項目を新たに設けて充実させる。

・各委員長からホームページ担当者へ、直接記事を送り、掲載を依頼する。

・それらがなされているかを広報委員長が確認する。

・次回理事会において、2012年度の総会開催地を決定できるよう、各理事が候補をリストアップする。

広報委員会からお詫び

News40号リレーエッセーの中で、お名前、もとしたいづみさんを「もとしたいづみ」と誤って掲載いたしました。誌面をもちましてお詫び申し上げます。

お知らせ

絵本関連展覧会

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

0261-62-0772, 0261-62-0774(Fax)

<http://www.chihiro.jp/azumino/>

【展示】ちひろの少女－記憶と心象－

3.1(火) – 5.10(火)

【企画展】東欧と日本を結ぶ 色と線の幻想世界 ドゥシャン・カラーライ×出久根育

3.1(火) – 5.10(火)

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

03-3995-0612, 03-3995-0680(Fax)

<http://www.chihiro.jp/tokyo/>

【展示】おめでとう30周年！－ちひろと黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』展

3.1(火) – 5.15(日)

【展示】ちひろ美術館コレクション 国際アンデルセン賞受賞画家展

3.1(火) – 5.15(日)

●軽井沢 絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町風越公園182

0267-48-3340, 0267-48-2006(Fax)

<http://www.museen.org/ehon/index2.html>

【企画展】グリム童話の絵本展～ドイツをめぐるメルヘンの旅～
3.2(水) – 6.13(月)

●絵本美術館&コテージ 森のおうち

〒399-8301 長野県安曇野市穂高有明2215-9

0263-83-5670, 0263-83-5885(Fax)

<http://www.morinoouchi.com/index.html>

【企画展】3人3様絵画展

1.28(金) – 3.15(火)

【企画展】森のおうち所蔵絵本原画展

1.28(金) – 3.15(火)

【企画展】なかがわちひろ作品展

3.18(金) – 5.17(火)

●木城えほんの郷

〒884-0104 宮崎県児湯郡木城町大字石河内475

0983-39-1141, 0983-39-1180(Fax)

<http://service.kijo.jp/~ehon/>

【展示】齋藤隆夫の世界展

1.3(月) – 2.27(日)

【展示】「チャイルド・イン・ミー」出版記念 シビル・ウエッタシンハの世界展

3.5(土) – 4.10(日)

●イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1

0266-24-3319, 0266-21-1620(Fax)

<http://www.ilf.jp/>

【展示】武井武雄の描く日本の民話「おりづるのうた」

11.19(金) – 2.22(火)

【企画展】熊谷元一の世界 童画と写真

11.19(金) – 2.22(火)

●安野光雅美術館

〒699-5605 津和野町後田1 60-1

0856-72-4155, 0856-72-4157(Fax)

<http://www.town.tsuwano.lg.jp/anbi/anbi.html>

【企画展】雲の歌、風の曲

1.1(土) – 3.9(水)

●世田谷文学館

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10

03-5374-9111, 03-5374-9120(Fax)

<http://www.setabun.or.jp/>

【企画展】旅する絵書き いせひでこ展

2.11(金) – 3.31(木)

●佐倉市立美術館

〒285-0023 千葉県佐倉市新町210

043-485-7851, 043-485-9892(Fax)

<http://www.city.sakura.lg.jp/museum/>

【展示】ベルギー絵本作家展

2.6(日) – 3.27(日)

●武蔵野美術大学 美術館・図書館

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736

042-342-6004, 042-342-6451(Fax)

<http://www.musabi.ac.jp/library/>

【展示】博物図譜とデジタルアーカイブⅢ

4.4(月) – 6.12(日)

出版のご案内

『生命の記憶 田島征三作品集1990-2010』

2010.12月31日発行 現代企画室

巻頭言「田島征三について」北川フラム

「<生命><素材><空間感覚>—絵本と現代美術の境界を飛びこえて進む田島征三」中川素子

対談「木の実と生命の時間」田島征三×宮迫千鶴

「征三さんと『絵本と木の実の美術館』」天野耕太